

令和5年度 大学院学校教育研究科入学式 ―学長告辞―

今年の春はとても暖かで、すでに桜の花も満開ですが、新型コロナウイルス感染症も少し落ち着きを見せはじめているこの春の良き日に、入学式を挙行できますことを皆さんとともに喜びたいと思います。本日は、専門職学位課程に入学された189名の新入生の皆さん、そして、修士課程に入学された14名の皆さん、ご入学まことにおめでとうございます。上越教育大学の教職員を代表いたしまして、皆さんのご入学を心より歓迎いたします。

これから2年間、教員免許取得プログラムの皆さんは3年間、また、1年制プログラムの皆さんは1年間、それぞれの目標の達成に向かって勉学や研究に取り組まれることと思います。私たち教職員は、皆さんのその努力が成果に結びつくように支援します。また、本学では、より高度な研究を希望する方々のために、専門職学位課程と修士課程の上に、連合大学院博士課程も設置されています。この博士課程は、本学を含む6大学で構成されています。

上越教育大学は、昭和53年10月1日に新構想の国立大学として設置されました。設立当初の計画では、現職教員の研修の場としての役割も担っており、入学定員の3分の2程度は教職経験を持つ者を入学させるということになっていました。昨年度より、本学大学院の入学定員は210名になっていますが、そのうちの190名が教職大学院、20名が修士課程の入学定員です。現在、国の政策として、教育大学や教育学部の大学院は、修士課程から教職大学院へと移行しており、全国ですでに54の教職大学院が設置されています。本学の190名の教職大学院は、規模としては、東京学芸大学の教職大学院の210名に次いで全国で2番目の規模となっています。

文科省のウェブサイトでの説明によれば、教職大学院は次の2つの人材養成を目的としています。ひとつは、「学校現場における職務についての広い理解をもって自ら諸課題に積極的に取り組む資質能力を有し、新しい学校づくりの有力な一員となり得る新人教員」、もうひとつは、「学校現場が直面する諸課題の構造的・総合的な理解に立って、教科・学年・学校種の枠を超えた幅広い指導性を発揮できるスクールリーダー」、この2つのタイプの人材を養成することが求められています。そのために、カリキュラムの一部には学校での実習が組み込まれています。つまり、教職大学院の制度が始まる前と比べると、これまで以上に実践的な指導能力の育成が求められていると言えます。しかし、実践だけが重視されるということではなく、教職大学院では、「理論と実践の往還」（つまり理論と実践の間を行き来する）ということがよく取り上げられます。理論と実践との関係については、すでに古代ギリシャの哲学者たちが議論しています。

たとえば、古代ギリシャの哲学者アリストテレスは、知識を「テクネー」と「エピステーメー」

と「フロネーシス」の3つに分類しました。「テクネー」は、技術的な知のことで、たとえば、情報機器を作ったり、そのソフトを作ったりする際に求められるのはこうした類いの知識です。「エピステーメー」は、真である知識のことで、ここでは理論知と訳しておきたいと思います。現代社会において考えれば、科学的知識といってもよいかもしれません。それに対して、「フロネーシス」は、道徳的な行動を可能にするような経験的な知識です。英語では、practical wisdom と訳されることもありますので、ここでは実践知と訳しておきたいと思います。学問的な探求は「エピステーメー」を求めることになりませんが、しかし、現実社会での問題解決は、この「テクネー」と「エピステーメー」と「フロネーシス」を総合的に活用する中で取り組まなければなりません。とりわけ、技術や理論を目的に向けて方向付けるという点では、「フロネーシス」が大切になってくるのではないのでしょうか。

高校生のときに『倫理』を学んだ方は、「プラトンの四元徳（4つの基本的な徳）」という言葉を知ったことがあるでしょうか。知恵・勇気・節制・正義の4つの徳目をさしていますが、そのうちの「知恵」と訳されている言葉もまた、ギリシャ語の「フロネーシス」です。「理論と実践の往還」に話を戻して言えば、皆さんに求められるのは、理論を実践の場で応用できるような能力を身につけること、実践から学んだことを理論構築に生かす能力を身につけること、そして、その両者を関連づけることです。

一橋大学名誉教授で経営学者の野中郁次郎氏は、このフロネーシスの概念を重視して、知識マネジメントの経営を提唱しました。彼は、フロネティック・リーダーというような用語も使っています。企業経営の場面でも、リーダーには、フロネーシスが求められるということでしょう。

こうした発想の必要性は、教職大学院に限らず、修士課程でも同様だと私は思います。本学の修士課程で新生を受け入れているのは、臨床心理学研究コースのみです。こうした領域でも、臨床場面で求められる実践知は、さまざまな学びから得た理論知と結びついて、問題解決につながっていくのだと思います。

実践知を暗黙知としてとらえ、その重要性を指摘したのは、化学者であり、晩年には科学哲学者としても活躍したハンガリー出身のマイケル・ポラニーです。彼は、語ることはできないが知ることができる事柄の存在を、暗黙知として示そうと試みました。それは、たとえば、人の顔の認識とか、レントゲン写真による診断とかの場面で明らかになります。私たちは、人ごみの中に親しい友人の顔を見つけるとき、その顔が視野に入れば瞬時に気づきますが、しかし、その特徴を言葉で表現するのは難しい。訓練された医者は、レントゲン写真から病巣を見出すことができますが、それを医学部の学生や素人に言葉で説明することはやはり難しいそうです。訓練によって獲得された暗黙知が機能しているということになります。オーストリア生まれの哲学者ルートビヒ・ウィトゲンシュタインは、『論理哲学論考』という書物の最後に、「語りえないものについては沈黙しなければ

ばならない」と言いましたが、教育や臨床の領域でも、語りえないものは思いの外たくさんあるように思います。そうした勤所としかいいようのないものを、明らかにすることもまた大学院の役割のように思います。

さて、大学院の在り方にかかわることを語ってきましたが、この上越地域のこともお伝えしておきたいと思います。ここは、豊かな自然に囲まれた地域です。北には、日本海があります。海の幸が豊かです。釣りもできます。海水浴場もあります。水族博物館もあります。国道8号線を西に向かえば、上越市の隣の糸魚川市には、フォッサマグナパークもあり、約1600万年前の東日本側の岩石と約4億年前の西日本側の岩石が接している様子を見ることもできます。東に向かえば、東隣の柏崎市には、恋人岬とも呼ばれる鷗が鼻展望台や日本海フィッシャーマンズケープなどがあり、浜焼きなどが楽しめます。上越市から南下すれば、妙高山や火打山などの山々があります。里山での散策も、本格的な登山もできます。山々にはスキー場もあります。温泉もたくさんあります。もちろん豊かな山の幸もあります。大量のナウマンゾウの化石が発見された長野県の野尻湖まで車なら1時間もかかりません。長野市も、新幹線で20分程度です。勉学に疲れたときには、こうした豊かな自然やこの地域ならではの文化を楽しんでいただきたいと思います。

最後になりましたが、本日ご臨席いただきましたご来賓の方々、また遠方よりおこしいただきました新入生の保護者やご家族の方々には、ご参加いただきましたことを感謝申し上げますとともに、新入生の皆さんの学究生活をさまざまな形で支援することをお誓い申し上げて、告辞といたします。

令和5年4月5日
国立大学法人 上越教育大学長
林 泰成